

人生の意味とマリアニストの靈性



私たちはゆっくりすることや考えを巡らす時間をあまり重要であるとは考えません。光や昼間のシンボルの方が、闇と夜のシンボルより大事なもののように見えます。私は多くの活動をして時間のやりくりを工夫しており、カレンダーは用事でいっぱいです。

私は人生の意味と目的を探して、いつも目標をたてていました。その目標はゴールや目的や行動計画を立てながら作成します。目標をたてたことで、もう達成できたかのような安心感を持つ気持ちになるのです。ですが、

人生の意味は、

積極的に待つこと

聞くこと

静かな時を過ごすこと

から自然とわかってくるのです。これらはマリアニストの靈性の**特徴**と呼べると思います。

人生の意味は私の人生の価値を見つけた私の素晴らし経験から見つかります。人生には、非常に特別な瞬間があって、人生の神秘や意味に気がつく様々な場があるのです。例えば今まで魅力的だと思っていたことが消えてしまいがっかりすること、偶然に見つけること、対話と交流、崩壊、道徳的あいまいさなどです。（「7. マリアニストの道に他の人たちを導くこと」参照）

私は「世界の宗教についての基礎コース」で教えていて、「不完全さ、限界性、～だけでは人生として不十分である」という感覚が、すべての宗教と宗教体験の特徴であることがわかりました。それで、私は人生の充足感や完全性を把握することを求めている、そのことに触れたことがあります。つまり私

にはいわゆる回心の出来事ということではない宗教体験があります。この宗教体験がマリアニスト・カリスマの背景になっています。

この探求の中心は信仰の二つの大きな要素である

誓約と受容です。「私は、本当は何が欲しいのか」という疑問に答えるために何かをすることです。それは誓約をたてること*⁽¹⁾と最優先または主要な可能性に向かって首尾一貫した方向をとることです。他のすべての選択肢を統合し優先順位をつけ、成長の法則は選択であると受け入れることです。率直で完全な「はい」という中に見られる私の過去と現在の現実的状況、つまり私の子供時代と私の両親、私の過去の選択、私の体力と現時点まで生きてきた歴史の限界、死の事実などに対して受け入れることです。

*⁽¹⁾ (シャミナード師は契約と奉獻ということばで具体的にこのことを述べています)

私の宝でありまた首尾一貫して私を育ててくれたマリアニストの霊性によって、人生の意味、人生におけるよりよいもの、不安を無くしていく感覚に導かれるのです。いつの日か私の人生の意味と不安を無くしていく方法を見つけるために自分の能力以上のものが私にはあるのだと信じます。「私が来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」(ヨハネ 10 : 10)

人生の意味、意義、人生そのものは、神によって与えられた全く無償の恵みだということは、時間を意識しながら探し求めることで得られるということがわかります。

情緒的になったり思索的になったり、また悩んだり希望を持ったりすることの繰り返しの中で日常的にどのようにこれを解決するのかは、霊性の力であると理解することです。神を体験することや神の存在に答える、神との関係の光の中で生きる過程です。特有の出発点、強調点、実践を伴うマリアニストの霊性は、すべてに違いをもたらします。この歩みのなかでマリアニストの霊性には動機の源、生きる方向性、養成のスタイルがあります。

私がマリアニストの霊性をいかに生きようとしているかを考えている状況の中で、それは以下の質問と同じくらい簡潔なものかもしれません。

- ・ 毎日誰が私を派遣しますか。
- ・ 私は何をするために派遣されますか。
- ・ 私はどのように行動しますか。

動機（モチベーション）の源

朝、何が私を起こしますか。誰が毎日、私を派遣しますか。誰が私を行動に駆り立てますか。マリアへの奉獻の行為や誓願の表明の日々の刷新が、これらの質問と動機に応えるために何かをすることだと気づかせてくれます。それはふたつのエネルギー源、私の人生におけるふたつの存在、

「三位一体の神」

「マリア」

です。

この方々が私を派遣します。

三位一体の神と同じように、私が生活しまたは関わってきたマリアニスト家族の共同体は、神の力を表現し、三位一体の位格の間でダイナミックな関係を反映しています。創造主・救い主・聖霊の相互愛は、一致と多様性の緊張を受け入れまた保ちます。

「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人をひとつにしてください。」（ヨハネ 17 章 21 節） シャミナード師はこの言葉の意味を理解し、マリアニスト事業計画に組み入れました。その事業計画は創造的であるのと同じように常に活性化し続けるものです。

徳の体系、三部門、三つの「カテゴリー」（多様性を惹きつけ維持するやり方）のようなマリアニスト織物の中のそれぞれの糸は、織目、豪華さ、柔軟性、色彩、美しさを持つ生地全体に必要です。

ナザレのマリアの旅とマリアの信仰の物語は、私自身の動機となっています。これは第二のエネルギー源です。マリアは徐々に期が熟して実を結ぶ不確かな将来に向かって「はい」と言い、自分とイエスのために安定した生活を得られました。自分自身を素早く変化させることのできる方法がいっぱいあるのです。この経験もまたシャミナード師の経験と重なり、師が 1839 年の書簡の中でマリアは「私たちが希望を持つ完璧な理由です」と書いていたと思います。今日、希望は動機の素晴らしい原動力だと思われれます。マリアニスト家族の中で、私はマリアのエネルギーと特性を経験しており、それが日々の動機の源泉となっています。

シャミナード師のマリアとの関わりと希望は、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」（カナの物語）に関連していると思います。私がかつてマリア会のヒュー・パール師から聞いたように、希望は私たちの救いとなり、ワインがだされるメシアの時代を私たちにもたらず神を受け入れる力であるとマリアが私たちに示しています。それでマリアのように、度々、まわりにいる人達を促す必要があります。マリアは召し使いを信用していますが、水がめをどうするか具体的なことは示していません。マリアが唯一優先して考えていることはイエスに集中していますし、マリアの目的はその時の必要に応えることであり、結婚の祝宴で皆の喜びに奉仕することです。マリアとマリアの家族は、特に私が個人的文化的限界を感じる時に、私を派遣しミッションに携わり続けるように促します。

パウロのコリントの信徒への手紙 1 に、マリアニストが捉えている動機のヒントがあります。「あな

たが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか。あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく」(1 コリ 15 : 36-37) マリアの召し使いへの言葉「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」は、そのような種です。私の知らない将来に堅忍の誓願をたてることは、私にとって同じような経験です。シャミナード師も創立者として成長した植木ではなくカリスマの種を蒔きました。それは**違う**時代に体になります。小麦やとうもろこしなどの穀物の種そのものを蒔くと、神が選んだ体が与えられます。各々の種はそれぞれ独自の体になります。

マリアニスト家族の共同体は、「**信仰を分かち合う**」共同体であり、「**希望を証しする**」ものです。現代の文化では希望を通してまたマリアの資質を伴う共同体での経験を通して、多くの人が信仰を持つようになります。私にとってこれはシャミナード師が「聖人の民」としてソダリティを説明したとき語ったことを理解する手段です。師は共同体が発展していく過程と同様に、共同体自体が私たちの奉仕のミッションの一つだと認識していました。

生きる方向性

私は何をするために派遣されますか。私は以下に直面するこの世界で、何をするために派遣されますか。

- ・ 世界的なテロリズムの脅威
- ・ 宗教的、民族的不寛容の結果起こる「他者」への恐れ
- ・ 世界的な環境の悪化
- ・ 発展途上世界と高度に発達した工業を持つ世界とにあるギャップ
- ・ 教育システムの基本的構築の必要性
- ・ 公共的、個人的道徳心の低下

私は何をするために派遣されますか。私の賜物である人々に仕えることへの招きに徐々に気づいてきました。私たちは大きな文化的変化の時代に生きています。一つの結論は困惑です。神は誰でどこにいますか。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」ということは、イエスの名のもとで一杯の冷たい水を与えることは同じように本当に簡単なことですか。

私には大きなエネルギーがありますし少なくともそう思えます。しかし私は影響を与えることに関心があり生き残ることではありません。どのような青写真もないのです。聖霊はどこですか。マリアニストの霊性は、私が召命を受けたこの奉仕職に答えることをどのように助けてくれますか。私は日々自分の共同体の中で何をしますか。どのように方向を決めますか。

マリアニストの伝統における共同体には独特なプロセスがあり、それはたぶん識別のタイプでもあるのですが、生きる方向性を決める助けとなり得ます。最近私は**手を差し伸べる**こと、**熟考し集中**すること、**派遣**することについて話してきています。これはマリアの人生の旅路について書かれている聖書の

解釈に基づいています。

シャミナード師が「それぞれの共同体はそれ自体が永久のミッションである」と述べたことを認識しています。ミッションに関わる生き方は単に計画や仕事の時のような生き方ではなく、私たちが本当の人生を生きる生き方です。その生き方は今の時代に求められている的確な必要性に応えるようにさえなりうるものとして繰り返されます。私にとって概念的に少なくともこれは絶え間のない共同体と奉仕の間に生じるジレンマの解決になります。「共同体それ自体が私たちのミッションを果たす第一の道具です。」

マリアニストの霊性は使徒的霊性です。派遣される宣教者と同じようなイメージです。「私たちの仕事は大きく素晴らしいものです。それが普遍的であるとすれば、私たちは『彼が言いつけたことは何でもしてください』』と言われたマリアの宣教者だからです。シャミナード師ははっきりと「教皇派遣宣教師」という自分の肩書きを高く評価していました。私にとってそれが何を意味するのかを理解しようと努めてきましたところ、空間や場所を考えるとあまり宣教師として活動してきませんでした。時間的には活動してきたと思っています。私は、今はもう存在しない世界で成長しました。私は「危険で困難な仕事」に合わせて派遣されてきました。ここで言うミッションとは単に洗礼者の数を増やしてキリスト者を増加させる面を意味しているのではありません。17世紀の伝統において、ミッションは信仰をかきたてたり回復させたり、伝統的な小教区の使徒職とは全く違う条件と構造の下で働く希望をもって、キリスト教に敵対する国で最も危険で最も困難な仕事を引き受ける準備があり、また喜んで引き受けようとする人を派遣することを意味しています。

私が派遣されてきた方向は「我が家」の心地よさから離れたところ。私は新しい言葉、時として技術や現代の若者、間違いなく現代の霊性を学ぶ必要があります。私が去らなければならなくなった我が家、絶えず呼ばれている我が家は、多様な形ではっきり示されます。それは慣れ親しんだ行動、習慣化した聖務、誓願の日に手渡された会則、すでに今は存在しない多くの与えられた特別な仕事です。

私が派遣されている方向は使徒として活動できるものです。宣教師は自由に行動できます。シャミナード師にとって宣教師のイメージは、宣教精神の最初の証人である初代教会の経験に見られます。初代教会には「教会」がどのようなものなのかという青写真はありませんでした。

キリストの霊とマリアの存在

がありました。

私はこのことを「教会の始まり」を書いた聖書学者であるレイモンド・ブラウンによってはっきり理解するようになりました。イエスは何も書物を残さず何かを組織することに何の興味も示さなかったように見えたことを理解していますし、イエスは慎重に弟子たちと姿勢についての言葉を選んだことをブラウンは指摘しています。イエスが組織化した教会を意図していることに関しては「漠然として」いま

すが、しかし初代教会はイエスが言わなかったことをしている時でさえ、イエスが弟子たちに望んだことを実行していると完全に確信していました。初代教会で興味深いことは、彼らは人々を一つにまとめ組織化することを望んでいたことです。これが成功に繋がっています。私たちマリアニストはこの点で優れていると思います。私にとっての生きる方向性はこのイメージで具体化されます。ブラウンは大部分でイエスの弟子たちの小さなグループの計り知れない成功は青写真を持っていなかったため、それぞれの環境でそれぞれの年代が聖霊に従ったからだと言っています。これは使徒的霊性が私たちになすべきことです。

養成のスタイル

かつてイグナチオ・ロヨラが「霊操がイエズス会士をつくる」と述べているのを読んだことがあります。彼は霊操の経験に言及していました。それはイエズス会の伝統の中で優れた聖人をつくる真剣な30日間の識別と祈りのプログラムです。もしシャミナード師がそのような言葉をつくるとしたら、

「共同体がマリアニストをつくる」

と言ったと思われます。シャミナード師にとってこれは単に共同体生活の原動力が聖性への証しされた道であるという洞察ではありません。むしろ共同体生活はイエスのミッションのためにマリアが日常生活の中で弟子たちをマリアの息子に似たものに形作っていくという師の信念に繋がっています。

養成のこの共同体的生活はマリアニストが経験してきたもので、その独自性は時として言い表すことが容易ではありません。共同体はマリアの家族であるとシャミナード師が強く述べています。これは、マリアによって形作られるというマリアニストの霊性の中心的な内容を理解する特別な方法を教えてくれます。良くて悪くても私たちは家族と呼ぶ親しい人間関係の中で、つまりその家族の中で大きな影響を与える人物のエネルギーによって形作られます。

私がこのことを理解するようになったのは、自分自身の家族の原点を調べ叔母のジョシーについて考えたからです。私の家族のほとんどは彼女の影響を受け、彼女が支配した空間とその精神力のもとに身を置きました。彼女は家長であり、特に重大な局面や過度期に、家族の中で動向を決定する重要な役割を持っていました。私が誕生した後、父は陸軍に徴兵され、母と私はジョシー叔母の所に引っ越しました。私たちは別の町に住んだ後、クレーブランドに戻る時にまた叔母の家に戻りました。叔父たちの何人かは離婚の時に自分の生活を見つめようとジョシー叔母の家で過ごすためにやってきました。彼女は私にとって知恵に溢れた人でした。私は特別な構造とプロセスをもつ叔母のスタイルに気づくようになりました。クリスマス・イブの食事は常に叔母の家で開かれ、その招待者リストそのものが教えでした。私の生活の心配事について話せば、私の悩みを正しく理解するシチリアの民話を話してくれるでしょう。

マリアニスト家族に入ってから、私はまたマリアの家族の躍動の影響を受けるようになってきました。これは「マリアによって形作られる」ことが何を意味するのか理解する方法です。頻繁な会合の本当のプロセスは一つの例です。混合構成、三部門、信仰の祈り、指導法といった独特の構造とプロセスはすべて養成の方法に特別なスタイルがあります。それらを通して憐れみを求め、感謝を表し、その日私を派遣したマリアとマリアの宣教者として共に歩む仲間たちと再び繋がります。私の人生のある時期、あまりに遅くまで働いていた私を招き、一日の終りのより默想的な雰囲気させるいつもの夜の祈りと同じくらいそれは簡単な構造でした。時間と奮闘しマリアニストの霊性を深く生きようと努力していく中で私はこのことを理解するようになりました。

また私は日々の活動の中での養成のスタイルにも気づいています。それはどのように相互に影響するか、何を見るか、どのように話すかです。私は今の時代の多くの進化と変革に手を伸ばし続けるやり方に気づきます。私はゼネラリストで多くのニュースレターを入手します。私は物事を、関連づけたり共同社会的な観点から見る傾向があり、それで可能性に向けて関連した過程と問題に対して共同体として考える解決法を支持します。グループで決定し、メンバーと共にじっくり考え、共同体としての観点で世の中について考えます。

例えば 1980 年代の後半、副管区長として任命されるかもしれない可能性があった時、共同体と一緒に私の動向を熟考したいと思いました。私は所属していたマリア会の共同体で話し、またカラマズーにある信徒マリアニスト共同体の「からし種共同体」のメンバーを集め、判断を下すために彼らと話し合いを持ちました。私は人々を集めることや、私が見るもの望むものを表明することによって、社会的変化に取りかかる傾向があり、これは共同社会のモデルになる傾向にあります。

共同体の中で生きることは私にいくつかの効果をもたらします。私がたぶん決して関係を持たないと思われる人々や共同体とより一層結びついています。私が関わってきた人たちのおかげで発展性や世の中に対する意識を大きくしてきました。生産性が私の中で育ってきました。芸術家それも鋭い美的センスを持った人たちと生きることは、私の経験と神への道を研ぎ澄まし、多様性に対する理解は大きく発展してきています。

私はマリアニスト家族の中で生活することによって、自分の才能や素質を刺激したり、集中することで養成されてきました。私は一人っ子だったので、何かを交渉するような能力を育てる機会を失っていました。その後私は意見の違いがあることや友人や共同体のメンバーに怒りを覚えることさえあり、またそれでも仲間を愛し愛されること、つまり共にミッションに参加していることを学んできました。私は教訓的な方法より啓発的な方法で人と向き合っています。私が元々予定していたような家族的な不動産業に進むより持っていた才能を開花したし生かしていると感じています。

マリアの家族を通してマリアが私を形作る弟子としての身分はまた、私の弱点や過度に早急な判断を下すとか野心を持つといった傾向になりがちな面を抑制し、昇華させ、変化させます。マリアの神秘について話す時や「最前線の背後で支えている」時、マリアニストが意味する最善のことは、たぶん私が

より働きのある神の道具になりうることです。この養成のスタイルの内容は、マリアニスト家族全体の中で行われるものなのです。マリアニストとして私のほとんどの年月をマリアニスト家族の中で信徒の共同体との相互依存を経験することは紛れもない私の特権です。この養成はシャミナード師の教会論にとってなくてはならないと私が理解したものです。それはシャミナード師が教会を理解し「教会にし」やり方です。これによって、言いかえればマリア会がその会則1条2項で「事実マリアの家族と深く関わっている他のキリスト者と接触することによって、修道者としての自分自身をよりよく理解できます。」と述べていることを経験しています。この教会論の中核にある重要なものは、マリアニスト・カリスマの恵みが既婚や独身を問わず、それぞれ違う生活形態にあっても呼びかけに応えた人に与えられるということで、それは私の経験から理解できます。それで他の伝統とは違って、カリスマの恵みは信徒にも配分され両修道会だけに与えられるとは理解されません。

マリアニスト家族の栄光の一つ、そして教会（特にパウロが持っている体のイメージからくる）に基づいて作ったシャミナード師の英知が示すものは、「混合なき一致」という言葉に含まれる役割の多様性です。従って不注意な平等主義も組織化されていない全体の中での職務の減少ありません。教会には洗礼を基本とした基本的な平等があるので、マリアニスト家族にもマリアニストの使徒としての霊性を生き抜くことへの呼びかけと応えに基づく平等があります。

マリアニスト・カリスマの養成のスタイルの特徴は、世界に恩恵を与えることができますが、これは簡単な道ではないと理解しています。形と養成についてウエンデル ベリーが述べている引用文が以下にあります

形は私たちが困惑させ意図したコースから逸らす障害として働く時、最もよく役立つものになると言えます。私たちが本当の仕事を実現する方法や、また本当の旅を始めるやり方が分からない時かもしれないかもしれません。困惑しない心は必要とされません。妨げられた流れはさらさらと音をたてる流れなのです。

私の直観によると、個人の徳（現代では大切な賜物です）が、共通善や共同体のミッションの徳と統合し称えようとして生じてくる曖昧な部分と困惑は、私たちが始めている本当の旅の一部です。

行動の大胆さに対する前兆として待つ勇氣、考える勇氣が自分にあるでしょうか。不確かな未来に福音の種を蒔きます。夏に雨や日照りがあり、秋に小麦と雑草を収穫できますか。共にマリアニスト家族を「つくり」続け、マリアへの奉獻に対する信仰の度合いに応じてミッションに励みます。再びウエンデル ベリーの知恵を借ります。

修道者、夫と妻、本当の農夫のような詩人は、たとえ正式な契約を結ぶために奮闘しても継続と努力を受け入れます。彼らは留まる準備をしてこなければなりません。もし留まるとすれば働かなければならないし、いい仕事と悪い仕事の違いを学ばなければなりません。よい仕事ができる才能は老人から若者に伝えられなければなりません。

誰が毎日私を派遣しますか。どのようなよい仕事をするために派遣されるのでしょうか。どのようによい仕事と悪い仕事の違いを知るのでしょうか。これらは私にとって霊性の問題だと思われれます。私

はマリアニストの霊性によって、自分の言葉によって立つ人になるため挑戦し続けています。その言葉はかつて述べられ、支持する価値のある言葉であるという証人になるように私を招いています。さらに、その言葉は地球の表面を刷新するエネルギーを指し示す言葉です。シャミナード師が1839年の書簡の中で与えた設立勅許状に次のように書かれています。「私があなたに与えた、いやむしろマリア自身があなたに課した重要なミッションにおいて、私は確信を持ってあなたの熱意を信頼しています。」

聖霊の働きの下で私たちの熱意はこの地球を変えることができます。マリアニストの霊性はそのような熱意を持つように私に働き、方向づけ、養成します。私はこれから先の数年間でこの恵みを分かち合うことを希望します。

参照：The Promise and The Path: Chapter2

2. 私たちの生活のなかの時間：マリアニスト霊性における意見